山折り

福祉文化通信

2018.12.22 Vol. 87

～ Well-being への道～

●発行者／広報委員会
中島 智・稲田 泰紀
●制　作／長瀬 さやか

日本福祉文化学会事務局　〒541-0047 大阪府大阪市中央区淡路町４-４-13 南星ビル701　Tel／Fax：06-4963-3410　E-mail：fukushibunka@lagoon.ocn.ne.jp

OSAKA
大阪

日本福祉文化学会 大阪大会報告

大会会長　石田 易司（桃山学院大学）

第29回 日本福祉文化学会
全国大会 大阪大会
2018年
10月27日（土）～
10月28日（日）
桃山学院大学
和泉キャンパス
聖ヨハネ館

秋の日差しがまぶしい日々でした。毎日通っていた大学だけれど、普段通らないところを通ると、ケヤキやサクラの紅葉がとてもきれいで、全国から集まっていただいたみなさんをいい季節にお迎えすることができて、喜んでいます。

私たちは本当に利用者の声をちゃんと聴いているのだろうか、という思いから「語り」という言葉をキーワードに大会を開きました。

冒頭の木津川計さんの東京と大阪の文化の比較からの語り文化についての話にまず圧倒されました。80歳をはるかに過ぎて、杖がなければ歩けないのに、しゃべりだすとしゃきっとしている木津川さん。ただの印刷屋のおやじが一人で上方芸能を研究し、大学教授にまでなった人の造詣は半端ではありませんでした。半分が武士だった江戸に比べて、大阪には武士がほとんどいなかったので、建前より本音で、また思いやりにあふれた文化、言葉が育まれたとか。まさに福祉の文化です。笑いもこうした世界から生まれたと。

その後、この文化論を福祉の世界にどう生かすかを考えるために、岡村ヒロ子さんをコーディネーターに、会員の清水明彦さん、結城俊哉さんと共同開催したスペシャルニーズキャンプネットワーク推薦の金香百合さんをスピーカーにシンポジウムを開きました。本当はお酒でも飲みながらという柔らかい発想の進行役の岡村さんは、前に３人並べるのではなく、４隅に会場を囲むように座ってもらい、そこからそれぞれの持論を述べてもらうという突飛な趣向。聴くということの大切さこそ、福祉の世界で私たちが最も大切にしなければならないこと、を痛感しました。

理事会、総会、自主企画、研究発表、懇親会など恒例のプログラムに、コリアタウン探訪など大阪らしい現場セミナーを加えて、２日間の日程を終えました。

次回は「名古屋」。今年、中京大学に転出したばかりの中嶌洋理事が、空白地帯を何とかしたいと立候補の声を出してくださいました。ぜひ、名古屋周辺の仲間を誘って参加していただければと思います。新しい福祉文化のうねりをみんなで名古屋から作り出しましょう。

シンポジウムの様子

福祉文化実践学会賞「いしずえ」が受賞しました

報告：永山 誠

福祉文化実践学会賞は、60年前に発生した薬害に対し1974～2018年の55年間、サリドマイド薬害被害者生活支援をおこなってきた「いしずえ」の実践にかかわった５名の会員が受賞されました。実践の成果は、我が国の福祉国家の到達点を示しています。佐藤嗣道氏（被害当事者、公益財団法人「いしずえ」理事長）、小川信子氏、阿部祥子氏、阿蘇道子氏、月田みずえ氏です。概要は学会ＨＰ参照。

Ⅴ 現場セミナーC

報告：渡邊 豊

コリアタウン探訪

コリアNGOセンター職員キムさんの案内で、大阪市生野区にある戦後の闇市から続く鶴橋商店街、コリアタウン、朝鮮学校を訪ね歩き、地域の歴史や現状について説明を受け、たいへん有意義でした。翌日の「私的セミナー」、聖徳太子建立の四天王寺（日本最初の福祉施設である悲田院）を訪ねたこともよかったです。

Ⅵ 現場セミナーD

報告：川北 典子

子どもの遊び場 大型児童館ビッグバンと冒険遊び場ちょっとバン

申しぶんない秋晴れのもと、同一敷地内にある屋外と屋内、二つの遊び場を存分に楽しんだ。運営主体は異なるが、いずれも、子どもの遊びは生きる力そのものであるとの理念のもと、「めっちゃオモロイ遊び場」、「豊かな遊びと文化創造の中核拠点づくりをめざして、おとなが真摯に取り組んでいる姿が印象的だった。

2018年度 総会報告

事務局長：岡村 ヒロ子

2018 年度の総会は、全国大会の 10 月 28 日（日）、９時から開催された。石田会長の挨拶では、今年４月、第７期役員体制は関西への事務局移転からスタートし、軌道に乗りつつある中での全国大会開催であること、意気込み等々が盛り込まれた。協議事項として①2017 年度事業報告②2017 年度収支決算書及び監査報告③2019 年度事業方針（案）④2019 年度予算書（案）⑤災害発生時対応マニュアルについて⑥福祉文化実践学会賞に関する規約見直しについての６議案が審議された。④の 2019 年度予算書（案）については、後期に入って日が浅いこの時期に立てると誤差が生じるという理由で年度末に計上することが提案され、審議の結果、承認された。予算に対する希望、災害時のデーター保存法、学会広報に関する提案、これまでの実践賞受賞者からの決意等々について活発な議論が交わされた。最後に会員減による財政難が会員から報告され、会員の方々へ学会の活性化に向けて具体的な策を講じて欲しいとの話があった。

九州ブロック活動――ブロック理事：雨宮 洋子

九州ブロックの活動

「福祉文化」「地域文化」「文化福祉」「個々の文化」を求め一人一人が幸せな生活が送れるように、福祉を生活文化と捉え研究会を行っている。

参加者は地域ケア、高齢者ケアに関わる介護支援専門員、看護師、ケアワーカー等が中心である。研究会の一つ「事例検討会」は事例発表とグループ討議を行いファシリテーターがまとめる。その後多職種でディスカッションを行う。後半は外部講師に依頼し前半の事例に関連した講義をお願いしている。この方式で30年が経過している。

福祉とは「一人一人の生活の幸福を止める（とどめる）こと」と恩師の一番ケ瀬先生は言われていた。私がこの学会に魅かれたのは福祉を「文化的視点」で捉え考えて行こうとする人々の集まりであったからである。

介護保険制度が始まり18年が経過しているが「文化的活動」が職員の忙しさや人手のなさから消えつつある。福祉文化の活動は生活に潤いを与え、楽しいと感じ、生きる希望を持つことができるように必要とされる時が来たと感じている。

北陸ブロック活動――ブロック理事：関矢 秀幸

芳香稚草園（ほうこうちそうえん）と福祉文化

今回の現場セミナーは、栃尾での開催。1926 年に誕生した芳香稚草園は、90 年という長い年月を経て、地域の子育てに携わっています。仏教の教えを基盤とした「生命尊重の保育」を福祉文化のこころと重ねつつ、参加者も何かを感じたことと思います。芳香稚草園の保育目標は、「もっと素直になれたらいいな　もっと感謝ができたらいいな」です。一人ひとりが幸せに、心豊かに生きる環境づくりは、学会の開設理念にも合致します。

今回のセミナーは、山間地の栃尾に息づく福祉文化活動を学ぶことができました。

※現場セミナー in 栃尾芳香稚草園の主催者、参加者の感想は学会ＨＰをご覧ください。

会員情報

● 2018 年 11 月 15 日までに新規ご入会された方のお名前と所属ブロックをお知らせいたします。（敬称略）
嶋田 芳男（関東）、真柄 希里穂（関東）、岡部 茜（関西）

● 2018 年 11 月 15 日現在
〈会員数〉個人会員 250 名　　学生会員 ７名　　団体会員 ６

山折り

大阪大会の概要をお届けします！

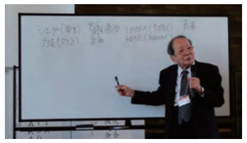
Ⅰ 基調講演

講演：木津川 計（立命館大学名誉教授 上方芸能評論家）

報告：脇坂 博史

語りのなにわ文化 ～江戸と上方の違いを中心に～

100万人都市といわれた「江戸」は、人口の半分が武士であった。一方、「大坂」の人口は40万人ほどで、武士は100人に1人程度。したがって、江戸の徳川家を守る警固都市に対して、上方は平和都市といわれる。大坂は天下の台所、商いの都市として発展するが、お互いの気遣い、気配りが重要で、言葉もやさしく、軟らかい表現となった。また、商いには「儲ける」ことが重要だが、「儲」の字は、他「者」を「信」じるということと、「人」（自身）と「者」（他人）との間の「言」（コミュニケーション）が重要ということで、商売は信用とコミュニケート重視という文化が育った。方言が衰弱するなかで、地方文化は方言と一体であり、方言を擁護し、標準語とのバイリンガルが重要となる。



Ⅱ シンポジウム

報告：結城 俊哉

『その人らしさが輝く語り』に参加して

今回のシンポジウムは、コーディネーターの岡村さんからシンポジウムの語源は、ギリシャ語のシンポシオン、お酒を飲み交わしながらあるテーマについて共に語り合う「饗宴」であるという説明でスタート。シンポジストの僕は、当日までテーマの抽象度の高さに戸惑っていた。

口火を切ったシンポジストの清水さんは、40年前の重度障害者との出会いから感じた体験が自分の原点にあることを「語り」、そして、金さんからは大阪YWCAでの活動を通して平和教育や人権問題への意識が開花し、それまで封印してきた幼い頃に受けた人種差別や難聴者であることへの自己開示した「語り」を聞いた。二人の「その人らしい輝く語り」受けた僕は、「語り」の問題を「ナラティブ・アプローチやセラピー」という切り口での解説・評論・批評は無益なことだと直感した。その瞬間、言葉足らずで解り難さが生じることは承知の上で、自分の「語り」の方向転換を試みた。おそらく誰もが予想していない、最近、手がけた外国の著者の「語り」と対話する「翻訳作業」という個人的な経験から始めることである。

そして、「語り」という物語には、「語れる相手、語れる事柄、語れる時と場」が必要なのだということ。そして、援助の場でのクライエントが語る「弱さの物語」から「輝く物語」への支援には、援助者自身の「弱さの自覚」が「ケアの力」の核心となるという話で締めくくった。（詳細は、ホームページ参照）

Ⅲ 自主シンポジウムA

報告：阿比留 久美

戦争をめぐる文化と暮らしを問い直す

2017年度の学会研究助成プロジェクトに応募した「戦争と福祉文化」グループ（結城俊哉・篠原拓也・岡村ヒロ子・阿比留久美）が、それぞれの研究成果を報告しつつ、戦争を引き起こす文化とそれに抗する文化のありようを探っていった。司会を月田みづえ会員がつとめられ、ご自身も戦争を経験された加藤美枝会員にコメントをいただいた。4名の報告者の報告の切り口が、芸術・坂東俘虜収容所・食事・子ども文化という異なるものであり、また報告人数が多く報告のボリュームも大きかったために、十分な議論ができなかった点が残念であった。報告者間の文化観や福祉文化観に相違がみられる場面もあり、福祉文化という言葉で実現していきたいもの、社会像はどのようなものかということも課題として浮かびあがってきた。

Ⅳ 自主シンポジウムB

報告：小川 雅司

福祉文化と「子ども食堂」の課題と可能性

地域の子どもに無償もしくは安価で食事の提供をする「子ども食堂」が全国各地で急増しており、現在はバブル期にあると言ってよい。子ども食堂は、地域社会において、重要な役割を担っているが、克服すべき課題も多い。たとえば、人、モノ、カネ、チエ（情報）といった資源の需給に不均衡が見られるほか、貧困家庭の経済的支援という偏見もある。また、食品衛生に関する意識が相対的に低いと言わざるを得ない。

そこで、社会福祉法人堺福祉会ハートピア堺次長の光永直子氏、NPO法人SEIN代表理事の湯川まゆみ氏、羽衣国際大学専任講師の片山千佳氏をシンポジストに招き、子ども食堂の社会的役割、課題とその改善策、新たな可能性について議論を深めた。

Ⅴ 自主シンポジウムC

報告：薗田 碩哉

福祉文化批評ワークショップ

福祉領域で日々生まれているさまざまな事象を「文化の眼鏡」をかけて捉えなおし、その社会的意義や問題点を批判的に検討するためのワークショップが6名の参加で開かれました。冒頭、薗田碩哉が「文化」を見直すための4つの眼鏡――①文化的な価値を発見する眼鏡、②福祉領域の特色が見える眼鏡、③「遊び」やアートを見つけ出す眼鏡、④福祉実践の背後に働いている力を見つめる眼鏡について解説、それぞれの参加者が自分の問題意識を披露し、「福祉文化批評」を書いていく手順を確認しました。理論的な問題からホットな現場の問題まで、テーマは多岐にわたりました。学会のホームページの「福祉文化批評」のページにはさっそく11月から新鮮な批評記事が登場するはずです。

Ⅵ スペシャルニーズ・キャンプ・フォーラム

報告：野口 和行

スペシャルなニーズがある人を取り巻くこれまでの環境と現在、そしてこれから

障がいや疾患、または経済的な問題や家庭の問題などにより必要となる、様々な配慮や支援のことをスペシャルニーズと呼びます。スペシャルな経験としてのキャンプをスペシャルニーズのある人も含めた全ての人たちに届けるのが、スペシャルニーズ・キャンプ・ネットワークの使命です。

このフォーラムでは、大阪で障がいの有無、性別、年齢の区別なく「Camp With～キャンピズ」の名の下に、さまざまなキャンプを実践しているNPO法人キャンピズの参加者、保護者、スタッフの計4名の方々にご登壇いただき、それぞれの立場からキャンプの魅力について語っていただきました。フロアからも活発な質問や意見が飛び交い充実した内容となりました。

Ⅶ 懇親会

報告：水流 寛二

小坂享子日本福祉文化学会関西ブロック担当理事の開会あいさつの後、大阪府キャンプ協会永吉宏英会長の乾杯の発声とともに懇親会が始まりました。今回の大会は日本福祉文化学会大阪大会とスペシャルニーズキャンプネットワークフォーラムの共同開催ということもあり、北は北海道から南は九州まで多彩な方が参集いたしました。

会を最も盛り上げてくださったのは70年代から京都を中心に演奏活動を展開されている、スペシャルゲストの末松よしみつさんでした。ヴァイオリンやギターを用いて、会場を縦横無尽に回りながらの演奏に酔いしれ、音楽と語りの福祉文化を堪能した宴となりました。

日本福祉文化学会石田易司会長のあいさつもって閉会となりました。

Ⅷ 現場セミナーA

報告：市田 響

バングラデシュとトルコの紅茶と文化

本セミナーは神戸学院大学准教授佐野光彦氏が持参したバングラデシュの菓子と紅茶を出席者に提供し、『cafe』的空間の演出を意識したものとなった。

Mehdi Hasan Kilan 氏による『綺麗なバングラデシュ』、創価大学非常勤講師の岩木秀樹氏による『トルコのお話』、そして筆者が『市田響写真展』として各テーマを報告した。

筆者は何気ない日本の日常風景を10年近く記録しているが、今回は佐野光彦氏が撮影したバングラデシュの街の写真と並列して展示することで、文化の再考を試みた。

人々の生活の営みの断片を記録写真として丹念に拾い上げることで、文化的な差異や風俗習慣の特殊性に気づく材料になることを祈っている。

Ⅸ 現場セミナーB

報告：朴 春代

国際障害者交流センター（ビッグ・アイ）を見学して

国際障害者交流センター（ビッグ・アイ）は、障がい者を主体としながら、芸術・文化活動や国際交流を通して社会参加の促進、障がい者のみならず、はば広く相互理解の場を理念としている。

そのため、施設には宿泊施設を始め、多目的ホールに多様なニーズに応えられるように最新の福祉用具機器を導入して環境つくりをされている。それでも、「ある人を対象とすれば、ある人には不便となることもある。」との職員の言葉が印象的であった。

すべての人が自己実現できるよう社会参加できる社会づくりには、お互いを認め、理解しあえるのが大切であるが、それには皆がふれあえる場所が重要であると考えさせられたセミナーであった。

谷折り

谷折り